

# kyushu landscape

風景デザイン便り（1）

## 「小林一郎さん、風景デザインって何ですか？」



小林 一郎  
1951年大分県生まれ  
熊本大学大学院教授  
風景デザイン研究会会長

### 一所から懸命に

#### 1) 京城

母は大正の後半、ソウルの繁華街である黄金町で生まれ、二十歳過ぎまで、そこで暮らした。冬には、大河・漢江が凍りスケートができたらしい。風の強い日は、手を大きく広げるだけで、滑って行けたという。今でも半信半疑だが、豊かな少女時代を楽しく語る様子から、再訪できない町への強烈な望郷の念を感じた。何度も繰り返される話を聞くだけで、私は風景の一部を共有しているような気になった。今も母の原風景は私の中にある。

#### 2) 別府

私は別府で生まれ、十七まで別府で育った。家の前の電車通り（国道10号）を横切ると旧別府港があり、関西方面からの観光客で賑やかであった。毎日のように、突堤（子供達はみな、固有名詞だと信じていた）や砂浜で遊んでいた。夕方に干潮が重なると、遠浅の海は子供で溢れた。三角ベースの野球、鬼ごっこ、隠れんぼ、貝掘り、砂城づくり、何でもできた。満潮時に潜れば、ザザエを取ったり、フグを突いたりした。立派に「海ガキ」の一人であった。そして、限りなく愉快な日々が続いた。いま、この海岸は埋め立てられ、大型ショッピング施設が建っている。すでに、私の原風景は存在しない。山河のイメージを変わらずに持ち続けたという点で、母の方が幸福であったに違いない。まさに、「ふるさとは遠きにありて思ふもの」なのだろう。

#### 3) 里昂

永井荷風や遠藤周作の語るリヨンはパリにもまして狭苦しい都会であるが、私が2年間を過ごしたのは郊外の学園町で、アパート群は森の中に点在し、リスも遊びに来た。共同のプールがあり、バスケット場もあった。子供を育てるには理想の場所だと思った。

車で5分も行けば農村地帯になり、本当に穏やかで美しい風景に出会う。空は青く、あくまで広い。雲

は刻々と姿を変えながら、光を操る。水平線が延々と続くかと思えば、峨々たる山渓も行く手に広がる。子供達に聞くと風景は断片的なイメージとして残っているだけらしい。熊本の砂塵舞う、小学校校庭のほうが、心地よい空間のようである。風景は、いつ、いかにして人の脳裏に焼き付くのであろうか。あるいはそれは、指や鼻や口や耳を介して胸に刻み込まれるものなのであろうか。

#### 4) 熊本

さて今、白川河畔の整備が一段落し、河床のデザインについて議論をしている。テーマは、「瀬や淵の再生」である。調べれば、こんな町中でも、数十年前までは、川ガキが溢れ、古式水泳の練習場も近くにあったらしい。

琵琶の首、黄金淵、梅木瀬、天神淵、小淵、道覚、崩れ剣、権現淵、八幡淵などは、子飼橋付近の「白川游場一覧」である。我々には、数キロにわたり川としか見えないところが、住民には5、6mおきに表情を変え、まるで人の肌に触れてでもいるように、微細な変化が読み解かれ、その特徴が命名されている。暮らしの中の地形とはこれほどに、人々の身体と表裏一体であったのだ。

我々は、それぞれの淵や瀬をできるだけ忠実に再生できないものかと、話し合っている。自然が、長い期間をかけて、造り上げたものを、再生するのは容易ではない。しかし、川ガキの血が騒ぐのか、構造デザインの時には、無口だった技術者たちが、熱く語り出したのには驚き、かつ喜んだ。何かが動きそうだ。

息子達には、間に合わなかったけれど、せめて孫たちには、海や川が学校になれるような環境の中で育つて欲しいものである。

一所にこだわり、暮らしの見える風景が蘇っていけば、九州はますます楽しくなると思っている。そのためには、誠実で、懸命な地域づくりを、我々だけでなく、きっと風景の方が求めているように思えてならない。